

答辞

柔らかな春の日差しが降り注ぐ春三月、この佳き日。私たちのために、このように盛大な式典を挙げていただき、誠にありがとうございます。

私たちはこの学舎で、雄勝高校最後の卒業生としての自覚を持ち、充実した日々を過ごさせていただいたことを深く感謝いたします。

思えば本校にも、少子化という時代の波が押し寄せ、生徒数も減少し、私たちが二年生になった頃から、様々な大会がクラス別対抗ではなく、全校縦割りの色別チーム戦になりました。それによって、同じ雄勝高校生というワンチームでの絆を深めることになり、競技を通して後輩は先輩を敬い、先輩は後輩をいたわり、リードする。そんな温かい思いやりの心がより深く育まれていき、少人数は必ずしもマイナスではなかったことを学びました。また、昨年度十月には米田教育長様はじめ、たくさんのご来賓の方々をお迎えし、四十周年記念式典が盛大に挙行され、本校の歴史の重さを実感できたことも記憶に新しいところです。

そして、年号が平成から令和へと変わった今年度。私たちは雄勝高校最後の卒業生としての自覚を新たにし、一人ひとりが誇りと責任を持ち、日々努力を重ねてきました。

球技大会では従来のバレーボールに代わり、地域の方々と一緒に楽しくグラウンド＝ゴルフを行ったことで、郷土愛がより一層深まった気がしました。

そして今年の学校祭は生徒全員が真剣にアイデアを出し合い、例年のない「郷土食」のコーナーやタピオカ、ワッフルの販売、図書部主催のリサイクルなどを企画し、本校のフィナーレを飾るのにふさわしい盛大な学校祭を実施することができたと思っています。

更に、雄勝高校の集大成として「雄勝高校を語る会」が行われ、一期生から創立当初の様子や歴史について、その一年ごとに重ねられてきた年輪のすばらしい輝きを学ぶことができました。また、金メダリストのマラソン選手浅利純子さんからは「何度転んでも何回でも立ち上がる」「今を全力で生きる」という実体験に裏打ちされた尊い教訓をいただき、私たちの精神的支えとなりました。

今、卒業を目前にして言えるのは、私たちは皆、それぞれたくさんの壁にぶつかりましたが、それを乗り越えられたのは、クラスの仲間、先輩や後輩たちとの温かい絆のおかげだということや、私たちを今まで支えてくださった多くの方々の存在があったからこそなのだという感謝の念が湧いてきています。

思えば本校の先生方は、入学当初から、私たち一人ひとりの個性を尊重し、いつも親身になってご指導くださいました。その結果、部活動でも陸上競技部の東北大会出場をはじめ、各種大会で活躍でき、文化的創作活動においても、文芸コンクールでの全県上位入賞や、読書感想画コンクールの全国大会奨励賞受賞等、数々の輝かしい成績を収めることができました。進路関係においても、私たちの夢や希望を叶えるため、いつでも相談に乗ってくださり、面接や作文指導など熱心にご指導くださったご恩は決して忘れません。

また、今日まで一番近くで支えてくれたのは、保護者の皆さんです。常に温かく見守り、大切に育ててくださったことを心から感謝します。本当にありがとうございました。

これから私たちは、それぞれの道を進む訳ですが、先行きが不透明な世界情勢ゆえ、想像以上に陰しい出来事が待ち受けているかもしれません。そんな時、母校での様々な思い出が夜空を照らす月の光のように、世界中のどこにいても、私たちの心を優しく包み、勇気を与えてくれることでしょう。

さて、在校生の皆さん。本校は来年度から湯沢翔北高校雄勝校に変わりますが、母校の校訓「自啓自発」の精神を忘れず、新しいことに意欲的にチャレンジし、校歌に謳われている「文化の華」の象徴として、地域の人々に見守られ、雄勝野に華麗に咲く芍薬のように、この雄勝野に文化の薫りを継承し続けてほしいと願っています。

私たちが卒業する今年は、幸い、世界の平和を願って開催される人類最大のイベント「オリンピック」が日本で行われる記念すべき年です。私たちはこの「雄勝高校」のゼッケンを胸につけた本校最終ランナーとして、人類の未来に希望を灯すべく、先輩方から受け継いだトーチを高く掲げ、誇り高く胸を張って今日、スタート致します。

こんなにも素晴らしく、かけがえのない日々を過ごさせてくださったすべての皆さま方に心から御礼申し上げます。どうかこれからも私たちを温かい目で見守り、応援していただきたいと心から願っております。

最後になりましたが、本日ご臨席くださいました皆さま方のご健勝とご多幸、地域校となる母校のさらなる発展を祈念し、答辞とさせていただきます。ありがとうございました。

令和二年三月一日

卒業生代表 本郷詩津希